

# 聞名仏教

第 169 号 毎月発行  
(発行日) 2024 年 10 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutsuji6@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号 17810 番号 7259431

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

## 世を治める秘訣 佐々木蓮磨

き、西郷さんの経世論「欲を浅くすればよい」という一言は、まことに経世術のポイントを抑えている

世を治める秘訣というものは、古来の聖賢はもちろん、政治家も常に心を砕いてきたものであります。文明開化の現代に到っても、今なをハッキリした方策は見つからないようです。やもすると文化が進むほど世を治める道が暗くなってくるような感じさえいだかせるのは、どういうわけでしょうか。明治維新のはじめ、大官が一堂に会して、国の政治について話合うたことがあったそうです。集まれる大官連中は、各々熱をあげてトクトクと自分の抱負を述べて、意見を戦わしていたそうですが、ただ一人、西郷さんばかりは黙って一語も発しないので、一人の大官が西郷さんに向かって一語も発しないのは、「最後さ

述べられないのは、どういうわけですか、一言あなたの意見を聞かせてほしい」と。すると西郷さんは、おもむろに口を開いて言われるには、「オイドンは、みなさん方のような立派な方策はわきまえておらんが、ただひとつ知っていることは、人間が少し欲を浅くすればよいということである」と。一同は、そのあまりにも意外な一言に顔を見合わせて、一語もなかったということでありませう。

この西郷さんの一言は、まことに簡にして要を得たものだと思います。どうも人間というものは、知恵が進み、理屈を知るようになると、徒に言葉が多くなつて、要点がつかみ難くなるのではないのでしょうか。現代の政界を見ましても、政見発表を聞いてみると、どういふ偉い政治家だろうか、こんな政治家に一国の

政治をゆだねたならば、おそらく立派な政治が行われるであろうと思われのですが、事実は全く逆です。今日の乱斗国会を始めとして、上層部のアツレキ、汚職や選挙違反などと、つぎつぎ挙げて行けば限りがありません。明るい文明の背後には暗い犯罪が殖えて行く現実、われわれに何を教えていますか。

思うに、今日の犯罪増は、豪華な文明に酔う、徒に欲心が増長するからではないでしょうか。犯罪の奥には、かならず邪欲が働いています。かように考えて行くと

西郷さんは、人も知る極めて無欲テイタン、常に清貧に甘んじて、物事に執着せぬ人でありました。西郷さんを中心にして、西南戦争という反乱は起こりましたが、あの薩摩隼人こそは、西郷さんに殉じたという、この力強い、そして美しい結合と統制こそは、西郷さんの策謀から生まれたものでなく、むしろ無策無謀、無私無欲の、清純な精神から生まれたのではないのでしょうか。

(昭和四十二年刊『安心清話』より)

## 《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日 (日) 午後二時始

講師 山口県防府市 宮田秀成 先生

\*なお同日十二月二十一日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

# 対話編

## 『浄土真宗』

15

A 「『仏説無量寿経』第十八願成就文を今一度引用しますと、

諸有の衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願ずれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。

ですが、前回は〈乃至一念〉についてお話をしました。次の〈至心に回向せしめたまえり〉については、聖人が『一念多念文意』に第十八願の成就文を解釈されている中に、**至心回向**というは、**至心**は、**真実**ということばなり。真実は阿弥陀如来の御ころなり。回向は、本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう御のりなり。

とおっしゃっています。そうすると『至心に回向したまえり』ということは阿弥陀如来は真実の心でもって、

名号を十方衆生に与えてくださる、といわれるのです」  
B 「『したまえり』というのは」

A 「尊敬語で、してください、と、ということですが」  
B 「〈至心とは真実〉ということばなり、真実は阿弥陀如来の御ころなり」といわれていますが、この意味は」

A 「阿弥陀如来の真実の心で仕上げてくださった南無阿弥陀仏の名号を私たちに与えてくださるのです。阿弥陀如来は法蔵菩薩の時、一切衆生を仏にしたい、助けたいという広大な願いを起し、その願いである四十八願を実現するために貪欲も瞋恚も愚痴もない真実清浄の心でもって、永き修行を完成し、法蔵菩薩は阿弥陀仏になられたのであり、南無阿弥陀仏の名号に、ご修行の結果の功德を授け、一切衆生に〈我が名を称えよ、必ず救う〉との誓いの

南無阿弥陀仏を私たちに与えてくださる。ウソもいつわりもへつらいもない真実

心で成就した、衆生の助かる南無阿弥陀仏（名号）を、衆生がこの南無阿弥陀仏で助かることに一点の疑いもない、その名号を私たちに与えて（回向）くださる、その真実心のことです」  
B 「そうすると阿弥陀如来が、一切衆生を間違いない助けたいもう真実心からの本願の名号を私たちに与えてくださるのですね」

A 「ええそうです。このことを裏から云えば、真実は凡夫の私の側にあるのではなく、阿弥陀如来の方に真実があるのです。その真実を名号として私たちに与えてくださるのです。ですから、私に知らせてくださる、表裏が真実そのもの、真実なる阿弥陀如来そのものです」  
B 「与えてくださるとい

と、なにか一つのモノガラのように思ってしまうのですが、南無阿弥陀仏が阿弥陀如来そのものなのですね。それを与えてくださるとい

うのは」  
A 「大事な問いですね。名号を与えてくださり、その名号を聞く〈聞其名号〉。その時に、阿弥陀如来様に出会い、阿弥陀様におさめとられるのです。ですから南無阿弥陀仏をいただくとは、南無阿弥陀仏を聞くことであり、南無阿弥陀仏を聞くとは阿弥陀如来様の〈汝を引き受ける、助ける〉という仰せを聞くのであり、聞く処にはからずも阿弥陀様ご自身にであうのです」

B 「南無阿弥陀仏の名号によつて私たちは阿弥陀様を知るのですね」  
A 「ええそうです。ですの、南無阿弥陀仏の名号を〈回向する〉ということは、名号において阿弥陀仏ご自身を私たちに知らせる、表裏する、露わにしてくださいのだと言えましょう」  
B 「では次に、〈回向は、本

願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう御のりなり〉についてですが、これはどういう意味ですか」

A 「アミダ仏は一切衆生を救いたいと願つて四十八願、ことに第十八願に〈一声なりとも念仏申すばかりで助ける〉という丸々の救いを成就したいという願いを建て、それを成就してお助けの南無阿弥陀仏を仕上げてくださいました。しかしこれを阿弥陀仏の手元にあるだけでは衆生は救われませんから、この誓いの御名を一切衆生に平等に与えたいという願をも建てられたのです。それが第十七願で、これを成就して一切衆生に南無阿弥陀仏の御名を与えて（回向）くださるのです」

B 「誓いの名号を私たちに与えてくださるのですね。ではそれは私たちの人生生活にどういうかたちとして現われてくださるのですか」  
A 「このことについては、『無量寿経』に、

如来の容顔、世に超えて倫なし。

正覚の大音、響き十方に流る。

とあります。如来の正覚の大音は十方の世界に響き渡っている、と説かれています。法蔵菩薩が正覚を成就して阿弥陀仏になられました。覺りを成就された阿弥陀仏の音声である南無阿弥陀仏は十方の世界に響き渡っているといえましょう。南無阿弥陀仏の音声の響き、波動は十方の世界に広がり渡っている。その音声の響きは万人にすでに至り届いているのです。しかし、それは縁がきて始めて人の上に南無阿弥陀仏の称名となつて出てくださるのであります。阿弥陀仏の波動、南無阿弥陀仏の響きは世界に響き渡っています。人の声とまでなつて具体的に現れるには縁が熟して現れるのであります。ラジオやテレビの音波は世界に行き渡つていても、それが受信される縁があつて実際に人間の耳に聞こえる音声となるように」

B「そうすると、人がお念仏を實際に申すようになつ

たのは縁がきて申すようになつたのですね」

A「そのように受け取ったらいと思ひます。だれもがすぐに念仏を申すことはないですね。しかし、縁が来れば何時でも今すぐにでも念仏は申されますね」

B「その縁とはどのようなものでしょうか」

A「それは一番の縁は諸仏善知識の縁ですね。いわゆる仏法の先生方のお勧めによつて念仏を称えるようになるのですね。あるいは親族が念仏者だったという縁もあるでしょう。あるいは仏教書なりネット法話なり縁で念仏するようになることもあります。遠くは七高僧、親鸞聖人やそれに続くお念仏の人々の歴史が縁となつて、私たちが念仏を申すようになるのです。このように縁が熟してお念仏を称えるようになるのも、アミダ仏の光明のはたらきです」

B「そうすると私たちが本願の名号を信じるずっと前から阿弥陀仏は名号を与え続け喚び続けておられたの

ですね」

A「ええそうです。そのように私の上にもまで称え現れてくださいる一声一声のお念仏が阿弥陀仏のご回向のたまものです。この与えられた名号を聞いて、(こんなものを) (この様な粗悪な私を引き受けてくださる南無阿弥陀仏様よ)と聞き受けたのが信心で、本願を信じた人に於て阿弥陀仏の名号の回向が現実的に我が身に成就されたのです」

B「ただ単に名号を称え、それを聞いていても、かならずしも回向成就とはいえないのですね」

A「万人に施されている南無阿弥陀仏であつても、この名号を(無知無能の私を引き受けたもう南無阿弥陀仏)であると受け取られていない間は、十全に与えられたとは言えません。ですから、与えられている名号を(我がため)(こんなものを)と受け入れることが一人一人に求められているのです」

B「そうすると本願成就文の中の至心回向は信前信後

を問はずはたらきづめ、回向されづめの南無阿弥陀仏の回向をいうのですね」

A「ええそうです。こうして南無阿弥陀仏の御名を聞いて信心が発起する、そこに私における十七願の回向成就があるのです」

B「南無阿弥陀仏の回向が私に成就して、受け取られるとどうなるのですか」

A「名号が私に成就すると、如来の仏心大悲である至心(眞実心)が私に与えられることです。仏心大悲が私の信心になつてくださる。そしてその信心が私において相続されていきます」

B「いただいた信心が眞宗の救いのかなめだということをよく聞きますが、なぜ信心が私の救いになるのですか」

A「信心は(信心の智慧)ともいわれ、信心の本質は大悲の智慧です。智慧とは眞実に目覚めた、あるいは眞実を知る心ですから、それが私どもの救いになるのです」

B「信心の智慧でどうい

ことが知られるのですか」

A「アミダ仏と人(私)が撰取不捨の奇しき関係に置かれて、撰取不捨の眞理を知るのが智慧です」

B「撰取不捨の関係とは」

A「アミダ仏と私は一体で離れないという事実です。一体でアミダ仏と私は不可分です。けれども私はアミダ仏ではないという点で不可同です。信心の智慧は私のいのちはアミダ仏のいのちのほかに無いと知らされることです。ですから南無阿弥陀仏の名号をいただくことは智慧をいただくことであり、智慧によつて阿弥陀仏ご自身をいただいていることを知らされるのです」

B「アミダ仏と一体であるけれども、私はアミダ仏ではないのですね」

A「ええそうです。広大な海をアミダ仏に、波を人に譬えれば、広大な海水の外に波は無いけれども、波は広大な海とは言えないのと同じです」

B「そういう関係が信心の

智慧によって知られるので  
すね」

A 「ええ、ただその知りよ  
うはほのかですね。クリア  
ーに知るのには聖者であり、  
仏菩薩でしょう。知っても、  
すぐ小さな自分にとらわれ  
て日常生活を送っているの  
が現実の私です。ですから  
どこまでも煩惱具足の凡夫  
です。その凡夫に、ファイフ  
イとアマダ仏が私の主であ  
りアマダ仏の大悲のいのち  
の外に私は無いと、お念仏  
において知らされます。知  
らされますが、すぐまた自  
我中心に返ってしまいます。  
悲しいことです」

B 「そうであっても信心の  
智慧は相続され、アマダ仏  
にどっちへどころんでも  
抱かれていますという真理の  
中にあることは失われな  
いのですね」

A 「ええそうです。それが  
信心の利益で、それを撰取  
不捨の利益と言います。そ  
れが信心によるこの世での  
救いです」

(了)

### 【住職雑感】

福井市に野世芳水師とい  
う浄土真宗本願寺派の大変  
信心の篤いお方がいて、師  
の著書に『聞いて称えるば  
かりなり』という書がある。  
題名そのものも有り難い。  
内容はご自分のご信心から  
感じたままを直接に書かれ  
た尊い文章である。型には  
まった真宗の法語ではなく  
て、ご自分の信心からの実  
感で書かれている。その中  
に詩があり、

「我の力で生きてると

うぬぼれ妄想過信して

ご恩しらずに罪造り

不足と愚痴と我儘で

恩に對して仇をなす

悪蛇毒龍の悪性で

仏に刃をあてるなり

こんな凡夫を尚更に

憐れみ見捨てぬ如来さま

ああ勿体ない如来さま

お許し下さいナモアマミダ

とあり、とくに「お許し下

さいナモアマミダ」に目がと

まった。こういう「お許し

下さい」というような言葉

は真宗の法話の中ではほと

んど聞いたことがないので、

これはこれとは思った。し

(了)

かし、これは師の実感のあ  
りのままである。私も先日  
バッハの BWV639 のオルガ  
ン曲を聞いているときに、  
なんともいえない深い感情  
に打たれて、思わず「神よ、  
我が罪を許したまえ」とい  
う思いにかられた。音楽の  
力はすごいなあと思うと同  
時に、野世師の詩を思い出  
したことである。私はバッ  
ハのオルガン曲はたまにし  
か聴かないのだが、この曲  
の深い美しさに気がついた  
のは、youtube でタルコフス  
キーの映画『惑星ソラリス』  
の一場面を見ている時この  
曲が流れてなんとも言えな  
い感情に引き込まれてこの  
曲の深さを知り、またタル  
コフスキーが偉大な映画監  
督だと後日知った。そして  
タルコフスキーがパリでな  
くなつた葬儀の時に友人で  
世界的な名チェリストのロ  
ストロポーヴィチがバッハ  
の無伴奏チェロ組曲の一節  
を教会で奏でている動画も  
見て、なぜ彼がバッハをこ  
の時に弾いたかに納得した。

### 《寺報「聞名仏教」の件について》

毎月発行していますこの念佛寺の寺報「聞名仏教」は念佛寺のホームページに毎月載せています。ホームページのアドレスは <http://nenbutsuji.info/> です。この寺報を同じ内容で A4 用紙にダウンロードできます。

寺報をお送りしているお方の中で、このホームページで読まれて郵送の必要の無い方は「寺報郵送中止」のメールを下さい。メールアドレスは [nenbutsuji6@gmail.com](mailto:nenbutsuji6@gmail.com) です。

### 《念佛寺同朋の会》

十月二十二日（火）

午後二時始まり

法話 念佛寺副住職 土井尚存

\*十月のこの同朋会の法話は副住職が担当しますの  
でよろしくお願い致します。